八代市地域学校協働本部だより　第８号

つなぐ

八代市地域学校協働本部（生涯学習課内）
令和４年２月１４日(月)発行　☎0965-30-1110

令和３年度八代市地域学校協働活動第２回地域コーディネーター連絡調整会議を開催しました。

質問：地域や社会をよくするために何をすべきか考えることはありますか
「１ あてはまる」「２ どちらかといえばあてはまる」
５７．３％（Ｈ３１）→５２．４％（Ｒ３）に減少（八代市小学生）
３６．４％（Ｈ３１）→４１．４％（Ｒ３）に増加（八代市中学生）

１２月１５日（水）午後２時から、八代市公民館において地域コーディネーター１３名に参加いただき、協働本部主催の第２回連絡調整会議を開催しました。協議では、事前に地域コーディネーターから質問いただいた全国学力・学習状況調査の質問項目「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか」の結果をもとに地域学校協働活動の意義について考察しました。

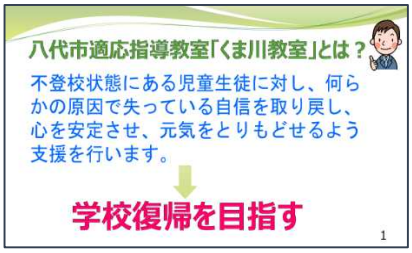
その後、地域学校協働活動の活性化について、「子どもたちが地域や社会のことを考えるようになるには」をテーマに協議を行いました。「子どもたちが地域の大人と触れ合う機会を多くする。」「地域の核となるイベント等（祭り、駅伝、神楽）を大事にする。」「行事を工夫して参加できる体制をつくる。」など、熱心な意見をいただきました。

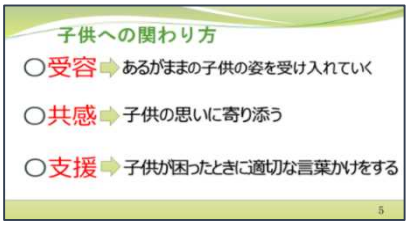
令和３年度熊本県「地域の人づくり講座」（八代教室）第３回を開催しました。

１２月２３日（木）午前１０時から、八代市公民館ホールにおいて地域コーディネーター、主任児童委員、地域婦人会、社会教育委員、学校関係者に参加いただき、県及び八代市教育委員会主催の「地域の人づくり講座」を開催しました。

今回は八代市適応指導教室「くま川教室」白濱孝治室長、宮﨑ゆみ子指導員を講師に、本市の不登校児童生徒への支援の拠点である「くま川教室」の取組について紹介していただきました。

「くま川教室」では、各教科や各種教育活動を含めた年間行事の中、多くの体験と人との出会いを通して、他の人とつながる力をつけ、自立できる子どもを育てられています。また、それには地域の支援等も大きな役割を果たしているということを知りました。





また、子どもの成長には「自分で選んで決めていく」経験が必要であること、待つこと信じることが大切であること、家族を支えること、子ども同士で育ち合い成長することなど、不登校生や別室登校生と対応するときの心構えとしてとても参考になりました。

現在、地域学校協働活動でも学校の課題（別室登校生対応）を解決したいという校長先生の思いから、９校が地域人材を活用して取り組んでいただいています。今後、更に活動の輪が広がっていくものと思います。今日の講演は私たちには何ができるか考える良い時間となりました。

《参加者のアンケートより》
- 学校復帰、社会的な自立に必要なことは人との関わり、コミュニケーション、交流ができるようになることで、それには地域の支援等も大きな役割を果たすことができるんだなあと思いました。
- 「自分のペースで歩んでいけばいい」この言葉が印象に残りました。自己有用感を持たせることが大切だと感じました。
- 今、学校の保健室登校の児童を見守る活動をしています。毎日、同じ時間に来れない、教室に入れない子どもたちにどういう対応をしたらいいか、とても参考になりました。

活動紹介《様々な学校協力活動》

１月に入り新型コロナウイルス感染症のリスクレベルが引き上げられ、引き続き感染防止を徹底させながらの教育活動が続いています。地域学校協働活動も予定されていた活動を中止せざるを得ない状況も続いています。今年度で市内の全３９校の小・中・特別支援学校に地域コーディネーターが配置され、地域社会全体で子どもたちを育てる環境が整いつつある段階で残念でなりません。今回は１１月以降に提供いただいた活動写真を紹介します。

《松高小 エプロン作成支援》

《八中 卒業証書づくり支援》

《太田郷小 傾聴ボランティア》

《二中 絵手紙支援》

《泉小 ミニ門松づくり支援》

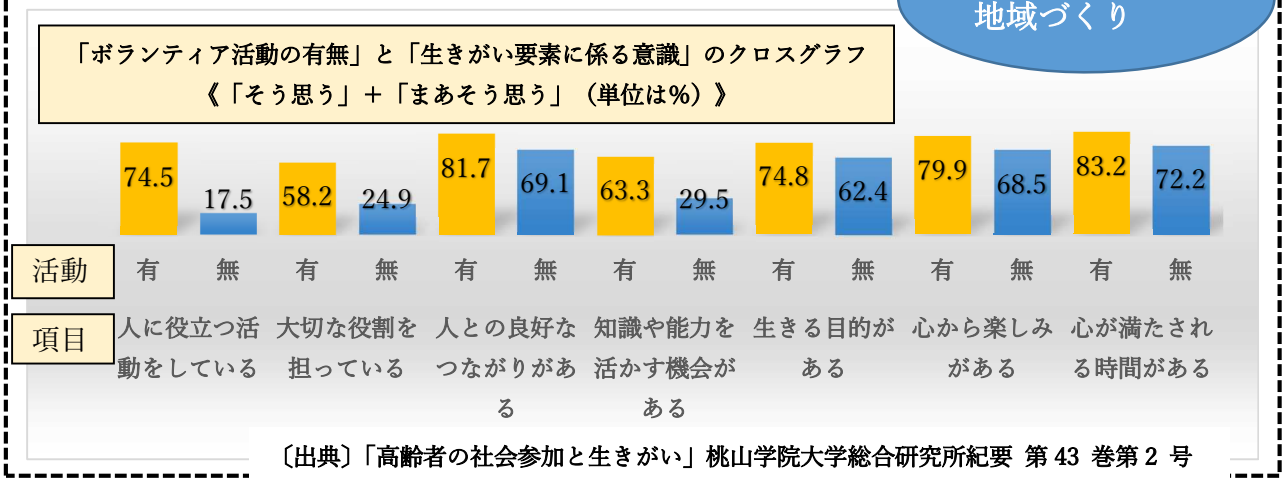
《文政小 大根収穫支援》

《郡築小 門松づくり支援》

《東陽小 書写支援》

ボランティア活動で生きがいづくり！

学校を核とした
地域づくり



〔出典〕「高齢者の社会参加と生きがい」桃山学院大学総合研究所紀要 第 43 巻第 2 号

今まで学校と家庭が行っていた教育を、なぜ地域も協力しなければならないのかとの疑問をよく耳にします。

上のグラフを見てください。グラフでは、ボランティア活動をしている人は、していない人と比較して、生きがい要素の項目について「そう思う」「まあそう思う」人が総じて多い結果となっています。このことからも、ボランティア活動が地域住民の生きがいづくりや自己実現につながっていることが分かります。

また、地域住民同士のつながりも生まれているようです。例えば、日頃から地域連携が進んでおり、顔の見える関係づくりができていると、災害時の避難所運営も円滑にできるということは、東日本大震災や熊本地震でも言われていたことです。

学校を拠点として、子どもや保護者、教職員、地域住民たちと関わり合うことは、まさに顔の見える関係づくりの実現につながります。

また、活動されている人たちに話を聞くと、「『最近の子どもたちは』と否定的に思っていたが、『子どもたち、そして先生たちって頑張っている』と思うようになった。」と学校への理解が進んだという意見も寄せられています。